

# 北半規管町一丁目の夜

大村伸一

1

町が移転してからというもの朝の混雑は並大抵ではない。町を出る道路はどれも狭く鉄道は単線で町を出ると戻って来るのは夕方になるのだし船は午後にならないと出港しないから町境を超えるだけでも午前いっぱいしかかかってしまう。毎日何人かは決められた事のように自転車で出発しようとするのだが五分も走らないうちにタイヤは歪んでまわらなくなる。それでも毎日何人かは決められた事のように自転車で出発しようとする。

そもそも町の移転の後町中の目覚まし時計は停止したのでありそれは電池を替えても動くことはなかったのだから今ではいつ朝がきているのか町の誰にも分からない。あと一年もすれば朝という言葉が何のことをいうのか知っている者はこの町にいなくなるだろう。

それでも町の住民は毎日何時の間にか仕事場に着いていて出勤の混雑の事などすぐに忘れるようだ。仕事場に着いてから夜が明けるのか明るくなってから仕事場に着くのかそれすらはっきり分からない。こんなことを周りの誰かに言っても誰もうなづきもしないのは結局町で朝のことを気にしているのがボクだけだからかもしれない。

ボクの仕事は看護師でこの病院に勤め始めてから一月が経った。二週間前に町が移転したときは町から出られずに無断欠勤してしまったがそれでも辞めさせられなかったのは町長がこの病院の院長に手紙を書いてくれたからだ。その時町長は町の住民全員の勤務先へ手紙を書いたらしいが最初の十通は何が書いてあるのか分からなかったのだという。見たことのない文字だったとその手紙を受け取った人たちは言い見せたくなさそうにしながら見せてくれたその手紙には上下を逆さまにしても顔に見える奇妙な絵が描いてあるだけで文字らしい記号はどこにも見当たらなかった。

病院では濃い化粧は禁じられていて香水もつけてはいけない。爪を伸ばすことも爪に色を塗ることも出来ない。ボクは化粧といっても自家製の化粧水をつけるだけで爪も短く切っていて以前はそれをあれこれ言われたのだがこの病院に勤め始めてからは誰もそれを非難することはなくなった。だからボクはこの仕事を選んだのかもしれないと思う。ボクはボク自身

でいることによって隠されている。

ボクは血管を見つけるのが得意ではじめて針を刺した時には針に怯えて腕の中から逃げ出した静脈をベッドのシーツの皺の間に見つけたし脇の下の動脈の時は浴槽の排水管の中でのたうち死にかけていた動脈を見つけた。僕はとりたてて血管が好きなわけではないが血管のことを考えるだけで血管の感じていることが分かる気がする。そんなことが何回もあってボクは入院患者達から注射の時に指名される二番人気の看護師になった。

ボクの担当する四階はフロア全体が一つの大部屋になっていてはじめの頃は患者を見分けるのに苦労した。四階の患者は全員薄いブルーの診察衣を着ることになっており入院した日から処方される薬の作用で三日もすれば体重と身長は全員六十キログラム百七十センチに揃い四日目の朝には顔や性別も同じになる。全員の名前が同じ「一七調類」になるように患者が眠っている間に看護師は熱心にサインペンで名札を書き替え朝には指先は真っ黒になっている。元の名前は汚物入れに捨ててしまい誰も古い名前があった事さえ忘れてしまう五日目には患者を区別する手がかりは何一つなくなっている。

大部屋ではベッドは四十掛ける五十に等間隔に並べられそのベッドの上では患者も皆同じ姿勢で横たわっている。寝返りを打つ時は掛け声をかけなくても一斉に同じリズムで身体をくねらせて向きを変える。病人の畑であるとか青い患者のイルカショーだとか言う看護師もいてそれを聞いた他の看護師たちは声を出さずに笑いあう。ほとんどの時間病室では患者は仰向けに寝ていて首だけを左に曲げそこに身内の誰かがいれば決まって思い出を話し続けている。病室の外からでも喉が動いて話をしているのが分かる。左に誰もいなければ患者は何も話さない。死んでいるのかもしれないが寝返りを打つ時間になると隣のベッドの患者に合わせてくるりと身体を裏返す。

「廊下に出られません」

「一七調類」という名札をつけ薄いブルーの診察衣を着た患者がそう言った。病室のドアを開ける順番を待つ列ができていてドアのところからベッドとベッドの間の通路を通って部屋の反対側の壁まで続いている。丁度ボクの目の前に立っている患者はやはり「一七調類」という名札をつけブルーの診察衣を着ていた。ボクは先頭の「一七調類」の前に歩いて行きドアを開けてみようとしたのだがそこにドアなどありはしなかった。大部屋にはドアも窓もないのだけれどいつまでも患者はそれを覚えられない。

手術の順番が近づくとその患者の診察衣の色がすこしずつピンクに変わり寝返りも他の患者の動きとは合わなくなってくる。看護師たちはそれを見て熟してきたねと声をかけ励ますのだけれど患者自身にとっては心細く感じられることの方が多いのだろう朝枕が湿って重く黒ずんでいることが多い。一度黒くなってしまった枕が元に戻ることはないので当番に当たった者はゴム手袋をして直接触れないように注意しながらその枕を医療廃棄物として処分することになる。ただ看護師の中には触れてしまう者が必ずいて数日もするとその姿は見えなくなってしまう。

手術の当日になると患者の身体から酸っぱい匂いが漂い他の患者たちは涎を垂らしてピンクの診察衣を着た患者を今にも食べそうな目つきで見始める。ピンクの患者のベッドを薄いブルーの診察衣を着た他の全ての患者が取り囲みベッドの周りの鉄のパイプを握りしめ音を立てて軋ませると看護師の中の一人が服を脱ぎ他の看護師に手伝って貰いながら病室の壁にぶら下がって蛹になる。一時間もすれば蛹の背中が裂けて中から白衣を着た医師が生まれ落ちるからそれまでには薄いブルーの診察衣を着た患者たちは自分のベッドに戻されベッドの上で顔を両手で隠しながら指の間から手術の様子を覗くことになる。

「手術はたった今」

生まれたばかりの医師は声帯が未熟なのでそれ以上言葉を続けることができないまま手術が終わるとすぐに死んでしまう。手術が成功したか失敗したかにはかかわらず医師はすぐに死んでしまう。ボクは医師が死ぬと他の看護師と同じように口紅を引き口紅の匂いに吐きそうになりながら一時間だけはそれを我慢する。

鐘が鳴っている。町中に鳴り響く三時半の時鐘だ。町はこの病院から電車で一時間程離れているのだが三時半の時鐘だけは毎日はっきりと耳に届く。そして鐘の音を聞くとボクは自分の家の前に立っている。

2

町の移転先はどこかの貝の中だと言われていて真夜中に歌を歌えばその声は次の日から毎朝繰り返す貝の中心にあたる空のどこかから聞こえる。その歌は一日ごとに音程が高くなり一週間もすると人間には聞こえなくなるのだがしばらくするとたくさんの鳥が空で騒ぎはじめさらに一週間で鳥の静まった後にはいずれ蝶の群れが空を曇らせるようになる。ただ歌

声の行方のことは誰にもわからない。

貝の中だとしてもそれは二枚貝ではなく巻貝で奥にゆくほど貝の中の空間はどんどん狭くなるのにそこに建てられた家はますます巨大になり一番奥に建っている建築物は家屋というより城砦でその城は貝の中でありながら貝が置かれているはずの外の世界よりもはるかに大きい。その家に住んでいる人物に会うために城を訪ねようという人が貝の外から貝の奥まで長い途切れることのない列を作っている。奥に進む列の先頭は今にも城に到達しそうに見えるのだがいつまでたってもたどり着いた気配はなく列はどこまでも長く伸び続けている。貝の入口から城までの距離は毎日正確に測定されているのでその長さが変わらないことは確実なのだが一方行列を構成する人数は毎日増え続けていて遠くから見ても行列が毎日ゆっくりと伸びてゆくのは分かるのだし先頭の人々は町がこの貝の中に移転した日からずっと歩きつづけていてその時間に見合った距離を前進しており貝の中心へと近づき続けていることも間違いなことだけれど城にたどり着く気配などまったくなく彼らが城にたどり着くことは永遠にありえないようにすら思える。勿論誰も知るはずのない永遠が本当に存在するのだという信念のような感覚はこの貝の中に生まれた行列を見ていなければ生まれないだろう。

行列の人数を正確に数えるためには計数官を雇わなくてはならないがその賃金は法外で大抵は素数計数官を代わりに雇う。素数計数官であれば素数しか数えないので随分安く上がるし行列の人数が素数でないなどということはほとんどありえないので行列の人数を数えるのに素数でない計数官を雇うことはない。素数計数官はおしゃれであると決まっていてこの行列の人数を数えるために雇われた素数計数官もその例外ではなく薄くてさらりとした布地の真っ赤なシャツとこちらは薄手だがややしっかりとした布地で作られた濃い黄色のパンツが鮮やかに貝の入口近くの家屋根の上で風に翻っている。鮮やかであるということは何か存在の本質を覆い隠す効果があるのにちがいに素数計数官がどのような生き立ちであり身長と体重もまた素数であるのかもし素数なら何桁の素数なのかを誰も知ろうともしない。

「行列の最後まで数えに行きませんか」

素数計数官に誘われてボクは少しためらうふりをしたがそれは言われた行列を病室にできたあの行列と勘違いしたためその行列なら人数はいつもわかっている。

「行列の正確な人数は必ずわかります」

楽観的な素数計数官の言う行列は城に向かう行列のことでその数を正確に数えるには貝の外に出なくてはならない。ボクは仕事に出かけるついでならと言いついでに素数計数官の座る車椅子を押しながら歩き始めた。家の前の道を連なる行列に並ぶ人たちの幾人かに素数計数官は声をかけ声をかけられた人は笑顔になって返事を返していたがそれが素数を数える唯一の方法なのだと素数計数官は説明する。唯一の方法というからには返事をした者が先頭から素数番目なのかあるいは声をかけられたそれぞれが何か素数に関係する性質を持つ人物だったのかそれともほかに何か理由があるのかも知れなかったがそれ以上のことを素数計数官は話そうとはせずただ時々列の中に声をかけるだけだった。

町の中を通る道は巻貝の殻の内側であり不規則に溝が並び車椅子がその溝の上で跳ね上がるたびに素数計数官の首もそれにあわせて揺れていた。

「貝の口より外に世界などないと教えられてきました」

「この貝の中でお生まれになったのですね」

「あるいは貝そのものかもしれません」

おそらくこのやりとりもまた素数を数える方法だったのだろう。車椅子の肘掛に埋め込まれた大きな数字が見やすいと評判のカウンターが素数から素数へと数を増やしていった。ただ素数以外の数を数えられないことが恥ずかしいのかカウンターは素早く増え続けどんな数を数えているのか見つめていてもはっきりとは見えない。

貝の外に出るとそこは砂浜で既に昼は過ぎ行列に並んでいるのは人ではなく飲み物の自動販売機や映画の中古映写機や半ば掠れた横断歩道や半分に裂かれたポスターから行方をくまらした架空の宇宙人とそれに誘拐された女や飛行機の時刻表が早く入口に潜り込みたそうに前のものの背中を押しながら列を形作っていた。

「この行列を構成する存在の総和」

車椅子の上で初めて見る貝の外の世界にいる物のひとつひとつに夢中になりながらも素数計数官は正確に素数判定を下したため息とともにこのように呟いた。それが感激の言葉なのか失望の言葉なのかはよくわからない。今日は仕事には行けないかも知れないと思ったのは行列が貝のある砂浜から国道に出て太って大きくなりすぎたため地平線を離れて高く上がれなくなった赤黒い満月の下すれすれをどこまでも続いて暗い山の中に消えていたからで

そんな山路では車椅子はいずれ壊れて素数計数官を背負ってゆく者が必要なのは明らかだった。

「遺伝子は一意に素因数分解されるのだと今初めて悟りました」

ボクがそう言うと素数計数官は表情も変えずかすかに頷いた。行列の終わりは見えなかった。鐘が鳴っている。町中に鳴り響く三時半の時鐘だ。町はこの山奥から満月七個分ほど離れているのだが三時半の時鐘だけは毎日はっきりと耳に届く。そして鐘の音を聞くとボクは自分の家の前に立っている。

3

町のある巻貝はゆっくりとねじれているので町の中心はなかなか見つからない。球覚の優秀な球犬(たまいぬ)を何匹も連れて町をさまよう人々は夕暮れになり我が家の前にたどり着くまで幾度も町の中心を発見したと確信するのだが犬の背中に寄生している水準器の中の泡は一旦静止してもすぐにまた揺れ始め本当はその場所が中心から最も遠い町の一角だということを証明する。

赤緑黄色の折り紙で仕立てた着物姿の独楽廻しは夜になると町に現れ道の真ん中に座り込むや手のひらをこすり合わせては次々と独楽を次々と廻し国道の上に放つ。独楽廻しの手から離れるや否やたちまち独楽は形が崩れはじめ触れられぬほどに柔らかくなりながら回転音の唸りを繰り返すうちに道の上を流れる液体に変わる。独楽廻したちの理論は単純で町の中心は町で最も低いところにあるというのだ。しかし国道を覆うようにして流れる独楽は道の上で俯せに横たわる人々と球覚を使い果たし道端に捨てられた球犬とを区別することができず結局どちらも一緒に引きずって下水溝に潜り込んでゆく。地面の下に沈む時巻貝の稜線に沿ってねじれている地軸や貝の中を永遠に吹き続ける偏声風に煽られて独楽の軸は定まった長さや方向を失い道路で眠る人の影と球覚を使い果たした球犬の輪郭を交わらせたり重ねたりしてしまうので町の地下三メートルでは生きているものには形がなく生きていないものには輪郭がないということになる。

おそらく中心など探さなければいいのだと高熱にうなされた後に目覚めた子供達は言いながら母親の顔を覗き込むのだが母親はやつれた我が子の視線に怯えて見つめ返すことができずその言葉の意味もわからない。そんな時ボクは心底母親にならなくてよかったと思う。

配属された産婦人科のベッドは生まれた後の子供にとって不愉快な振動を発生しているため母親に会いに来た子供達は吐き気と頭痛と高熱で一分もたたずに病室から逃げ出してゆく。その仕組みは医師の間では古くから知られていて新しい妊婦が来るとその夜の間担当医がベッドの下に潜り込み装置を取り付ける。装置を取り付ける音は必要以上に煩いので看護師が病室の中で花火に火をつけたり鍋や盥をわざと床に落としたりして妊婦の気をそらさなくてはならない。この装置を出産に必要な五つの条件の一つだと産婦人科医たちが主張する一方でこんなに煩くしたのでは睡眠不足になり出産がうまくいくわけなどないと外科医達は噂している。

生まれたばかりの赤ん坊は空気よりも軽くすぐに空中に浮かびあがり天井のあたりを漂ってなかなか手が届かないから臍の緒を手繰りあやまって窓から外へ逃がさないようにしなくてはならない。空中に浮かぶことは赤ん坊にとっては不安なのだろう天井のあたりに浮遊しながらも赤ん坊は泣き叫ぶのだし母親も決まって「私の赤ちゃん私の赤ちゃん」と繰り返して叫びながら医師が赤ん坊をだかせてくれるのを叫び続けながら待つ。それはつまり泣くことによって肺はもとより全身の筋肉が痙攣しその痙攣によって赤ん坊の質量が増加しその結果赤ん坊は地表に少しだけ近づくのだとどんな家庭の医学書にも書いてある通り。臍の緒がなくなれば赤ん坊はなかなか捕まえられなくなるのに何故臍の緒を切ったりするのかとはあまりにもよく聞かれる質問なので母親と赤ん坊の間に働く力はそれぞれの質量に比例し臍の緒の太さに反比例するため臍の緒を切断することで両者の間に働く力は理論上は無限になり実際にはこの場合もわずかに赤ん坊は重くなり浮かび方が弱くなるのだと看護師長が早口で説明した。暗記したその説明を話し続ける間看護師長は臍の緒の両端を掴まんで離さずにリボン結びをしようと夢中でボクを見ようともしなかったからその説明はきっと嘘なのだろう。

生まれて三日目の夜になると眠っている赤ん坊の耳の中にカタツムリが忍び込みそれから赤ん坊が空中に浮かぶことはなくなる。そのカタツムリが赤ん坊の耳の中に忍び込む様子を観察する当番が看護師の間で五日に一度回って来る。赤ん坊の耳はカタツムリの首より細くてカタツムリの殻など絶対に耳に入るわけがないのだが毎回その殻が一番最初に耳の奥に潜り込む。勿論その順番でなければカタツムリが赤ん坊の耳の中に入り込むなどできるわけがないことは医院長産婦人科医長看護師長カタツムリ担当医それぞれにより幾度も説明を受けているのだけれど実際にそれを目にするとやはり信じがたくて驚いてしまう。カタツムリの殻は町のある巻貝とは違い薄茶色をしていて齧ると甘い味がしそうでそう思うものは多いらしく齧られたらしい小さな歯型が殻のあちこちに見られる。

生まれたばかりの赤ん坊にはまだ名前がないので赤ん坊のために作られたカルテには担当医でなくても好きなことを書くことが許されており看護師はメモや伝言用紙として使いあるいは患者ですらたまに落書きをして注意を受け夕方の点滴が半分に減らされたりもする。ボクは観察の順番が来ると決まってカルテにこのカタツムリの絵を描くことにしていて絵を描くことに夢中になって咎められたことも何度かある。それでもカルテを読み返してみるとカタツムリの日に当番になった者は決まってそのカタツムリの絵を描いていてまるでカタツムリの絵を描くことこそが当番に課せられた使命のように思えるので看護師長にそう話をするとなればカタツムリの絵ではなくてカタツムリ語なのだと打ち明けてくれた。そう言われて読み返してみると確かにカルテに書かれているのはカタツムリの絵によく似てはいたが絵ではなく読みにくくなってはいるけれど文字だということは明らかだった。文字を構成する線はどれも渦を描いていてどこから始まりどこで終わっているのかは明瞭ではなくおそらくさまざまな出来事いうなれば歴史を表記するのにこれほど適した文字はないだろうと思えた。ボクはカルテの渦巻く文字を読みながらももしも看護師にならなかつたらきつと言語学者になってこのカタツムリ語を研究していただろうと気づいた。偶然かもしれないが言語学者もまたにおいのする化粧は禁じられ手足の爪を胸の痛くなるような色で着色する必要もない職業だった。

ぐるぐると渦巻く線の隙間をよく見ようともう一度カルテに顔を近づけるとカルテから雨の後のアジサイの花の生臭いにおいがしてボクはすこし吐きそうになった。病院で花のにおいを嗅ぐなどということがあるとはこの仕事に就く以前には思いもしなかった。アジサイの小さな花びらは風もないのに震えそれぞれがちいさく甲高い音を立てて鳴った。それは町中に鳴り響く三時半の時鐘だ。町はこのカルテの葉替りに使われている臍の緒の先に結わえつけられた巻貝の中にあるらしく小さすぎてとうていボクには住めそうもないのだが毎日の時鐘だけははっきりと耳に届く。そして鐘の音の最後の響きが消える頃ボクは自分の家の前に立っている。

4

町の空はどこも灰色で町もやがてその灰色に染まり世界から色彩がなくなってしまうのではないだろうかと人々は会うたびに噂していた。町が移転してからというもの窓辺に置いていた鉢植えの食虫植物は飲み込んだ蜘蛛や甲虫をいつの間にか吐いて未消化の吐瀉物が床の上で半ば溶けた形のまま乾燥し部屋に酸っぱいにおいを染み込ませてしまっていた。その残骸はすでに目や体表や細く強い脚に元々あった光沢のある紫や赤や緑の色彩を失い灰色

に変わっていて見ていると虫は死んだから灰色になったのだろうか。それとも灰色になったから死んだのだろうか。

外から見ると貝殻は赤みを帯びてぼんやりと輝き内側の町で生活している人たちの姿が微かに動いて見える。浜辺では砂粒と巻貝は見分けがつかないうえに浜辺ではどちらもよく見かけるので自分の町のある巻貝を見つけるのには苦勞する。もしも見つけられたら無くさないように身につけておくかより確実な方法もある。町の灰色の空の色は外の光が貝殻を通過するとき光とは違う何かが変わってしまうから空を見続けていると空の灰色は眼球の内側に忍び込みそれでも痛みはなく痒みすら感じないのでやがて眼球に満ちた灰色は目蓋との隙間から液体としてこぼれ出し服の胸のあたりをぐっしょりと濡らす。そのときになって初めて見えているものが何もかも灰色になっていることに気づき商店街の入り口に掲げられた大きな看板は最近大巻貝商店街と名前を変えて新しくなっているのに深紅の文字は背景と同じ灰色の濃淡にしか見えぬ路線バスの車体に描かれた鮮やかな色使いでチューブから絞り出された絵の具を描いた広告もすでによくわからない。

灰色の空にはかつてのように雲が浮かんでいるわけではなく空全体が薄く歪んだ半透明の灰色できているのはあまり長い間空を見つめ続けなくても分かったしその空の外側には錆止めを塗って朱に染まった針金をねじり合わせた骨格をもつ月が薄っすらと見えることもあった。空の外に月の他何も見えなかったのは月でないものはもうみな灰色になってしまっているからかもしれない。

国道を走るバスはどれも車体の左側が沈み国道の左側にどこまでも続く茶色の塀にドアをこすり続けて走り乗客はバスが巻貝の外に出るまではどこにも降りることなどできない。乗客はどこから乗ったのかと運転手に問い詰められると下を向いたまま何も答えられないのだが運転手にしたところで始発の町がどこなのかさえ知らないまま燃料計の目盛が動くたびにバスが動かなくなるのではないかと脂汗をかきその汗でバスの床は一面水浸しだ。ハンドルを回し続けなければまっすぐに走ることのできないバスの運転手は風もないのにくるくると回る道路標識にからかわれていると信じてアクセルとブレーキをかわるがわるにかけるから乗客はバスから振り落とされないように床にしがみつくしかない。道路標識に描かれた矢印は回転するたびに大きさや向きを変えて運転手の運転はいつも合法でなければバスの仕事を続けられない。

バスの床に隙間なく残された爪痕は急停車急発進のたびに乗客たちが立てた爪痕だ。運転手の流した汗がその跡に沿って流れバスの運動に合わせて揺れ細い流れは少しづつ合流し後部座席に向かうにつれ大きな流れとなりバスの後方では一つのゆっくりと流れる大河に変わり乗客の何人かを浮かべながら最後尾の窓から外に流れ落ちてゆきその後にはいつも

と同じバスの床だけが残る。

急激に動くバスの床で擦り削られて町の住民はみな左足が右足よりも短くなっており国道に沿って歩けば左側に見える光景が右側に見える光景よりも近いので進めば進むほど左に曲がって道を外れてしまうはずなのに実際は歩き続けると国道に沿ってまっすぐ海に向かうことができる。海が近づいてくることは海の吠える声が大きくなるので分かるから大抵の人たちはその声に怯え途中で海から遠のこうと両足を複雑に動かして元来た場所に帰ろうとするがそれは決して成功せずやがて浜辺に到達し海の遠吠えを間近で聞くことになるけれど海の姿を見ることはない。

砂浜に落ちている巻貝は本当に小さくていつか砂粒と見分けられるようになれるとは誰も思えないが自分の住む町が中にある貝となるとすぐに分かるので手に取ればその貝殻の表面が少しも灰色でないことに驚く。貝の殻を透かして内側を覗けば町の全体が灰色なのではなくそれぞれの家屋に隣接する貝の口のある方向に林が作られていてその林がいつも灰色に輝いている。貝の口から朝日が射し込む時間は林は真っ白に光り雪が積もっているように見えるけれど巻貝の中で雪が降ることはないだろう。

ボクも産婦人科で働くようになって初めて巻貝が人から産まれることを知ったのだけれど巻貝以外の海産物の出産されるところを見たことはない。産まれた巻貝は臍の緒を切ると毎朝真水を与え日に三時間は母親に抱かせなくてはならない。抱かせないで育てると巻貝は育っても母親が枯れて死んでしまうのだと言われているらしいのに植物でもない母親がどうして枯れるのかボクにはよく分からなかった。海産物を産んだ母親の手に触ると乾いた肌が摩擦で発火しその火が壁に燃え移り病院は火事になるというので母親に触れてはならないとされているけれど巻貝を産んでいないから発火するはずのない母親にまで触るなど看護師長は厳しい顔で毎朝言う。それでは毎朝巻貝だけでなく母親にも水を与えればよきようなものなのにベッドが水浸しになるからという理由でそれは許されていない。

巻貝は形で巻貝と知られるだけで表面の模様や割った内側の肉は日が経つにつれて灰色になり店で売られている巻貝と少しも似ていない。巻貝だけでなくその巻貝を産んだ母親も一週間としない間に全身が灰色になるからその頃には母親が巻貝を産んだのかどうかは明瞭になる。ただ毎日巻貝を産む女は必ずいて病室の灰色でない母親のどれが巻貝でないものを産んだのかはいつまでもすぐには分からない。

病院にいる間に巻貝は最初の言葉を覚え一日中大声でその単語を繰り返し泣き叫ぶようになるので医師はあわてて退院を命じるけれど言われるままにベッドを開ける親子は少ない。医師も本気ではないらしく防音ヘッドフォンをつけてなるべく授乳室に近づかないように

している。巻貝の覚えた言葉を記録する手帳は看護師室の机より大きくて新しい言葉を書き込むために三人あるいは四人が力を合わせなくてはならない。記録するのは看護師の仕事で言葉の意味によって担当がきまっておぼくは「食虫植物」と「内臓脂肪」の係なので今まで手帳に二度書き込んだことがあってそれは三十八ページと百二ページになる。手帳の最初のページの一行目は「くじら」「吊るし首」「三月十二日」から始まり最後の行は「鉄道模型」で終わりそれが二百ページ以上続くけれど手帳を繰ってゆくと次第にどのページも左側の厚みが増して右側が薄くなってゆきページをめくる指の先端がそのページのどこかに挟まり動かなくなるので最後のページを開いたことは一度もない。

巻貝は真水を十日間与えるとその口から海水が流れ出しはじめる。すると母親たちは病院を離れ海が干からびてしまわないように海水を吐き出し続ける巻貝を抱いて海の方へと歩いてゆく。裸足で海に入るとき波は初めて鐘のような音をたてて鳴り新しい海水の誕生を知らせる。海の波の鐘のなる時間はまちまちだけれどもそれはいつでも町中に鳴り響く三時半の時鐘だ。そして鐘の音の最後の響きが消える頃ぼくは自分の家の前に立っている。

## 5

ぼくの働いている病院には病人はいないので医者はおっぱら聴診器や注射器や血圧計中にはカルテの症状を診察して一日を過ごし月末になると医療機器のこの一月の間の病状の変化について第三会議室で開かれる定期報告会で発表するのだが院長以下多くの医師が参加するこの定期報告会には院外からも聴講を求める者が多く整理券さえ入手し難い。

カルテは医療の根幹でありそこで使われる文字は持ち運びに支障がないように驚くほど軽く作られているのに反してカルテの診察にかける医師たちの熱意は重く毎週最初の一日をかけて検査を行うとその結果に関して十人の医師がカルテとともに意見を交換し合いその議事録と要約は夕方までにはカルテの新しいページに記載されている。

カルテは自分自身に書かれた自分の病状を読むために長い辺をくるくると丸め自分の内側を覗き込もうとして毎朝そこには何も書かれていないことに気づくのだが実は記載されている症状や所見や処方ほみな夜間にその丸められた紙の裏の部分に移動しカルテ自身には見られまいとしていて医師や看護師がたくらみに手を貸しているのだからたとえ意見交換会に出席していてもカルテには真相は知りえない。

医師とはいえ昼間は日光を浴びる必要があるので体温計の診察は後回しにされ病院の裏手

にある旧棟と呼ばれる施設に収容された体温計の温度は集められて本館の暖房に使われるだけでなく国道をさらに十キロ進んだ先の植物園にも供給されておりそこで観察されたとおり植物の成長がはやくることや中には人の真似をする針葉樹までもが現れたことで体温計を買い求める人が増えおそらくその中には人だけでなくヒマワリや桜のように知性のある植物もいたのに違いない。

感染防止のため病院にはないはずの窓が診察室には必ず一つあり医師も看護師もその窓から射し込む光で毎日二時間の日光浴をすることを義務づけられているのだがそのために服を脱ぎ足を水槽に浸けたまま何もしないでいるのは耐えられないと誰一人そんな指示に従わないので院長と看護師長だけが一日のほとんどを日光浴をして過ごしその間他の窓の光は暗くなるかわりに院長と看護師長が生み出す酸素で病院では全員が呼吸を続けていられる。

それでも休日には大勢がお見舞いに訪れるので酸素の供給が追いつかず何人かは呼吸に苦しむことになりその中にボクが含まれることも多くそんなときはボクは許可を得て車椅子に乗って病院の中を駆け回り患者と間違えて医師さえもがボクの進路から慌てて跳び退くとき青ざめたボクの唇は大きく開かれまるで笑っているように痙攣して見せるから誰もそれをボクが酸欠で意識を失いかけているのだとは気づかない。

車椅子の検査の順番に当たった日はいつも血管が見つからずに採血で苦勞をするのでいつからかボクは処置室に置いてある観葉植物の葉の裏側から血を採ってそれを車椅子の血として検査伝票を切ることにしていて勿論車椅子も観葉植物も患者としてはあまり違いはないので問題が起きることはなく観葉植物の葉の裏にあいた沢山の注射針の跡を見ればそれは車椅子だけの代理採血をしているのではないらしい。

病院の中はどこも灰色の光に照らされていて灰色でないものを見つけやすくしているので注射器から零れた血液や生まれたての未熟児を間違えて踏みつけることは決してなくそもそも大量に消費する灰色の光が院長や看護師長や観葉植物などの植物の働きによって生産されているのは誰もが知っていてそれ故院長や看護師長や観葉植物に水を与えることは毎朝の最初の仕事になっている。

それから病院の受付には大きな時計の花が咲いて外来の患者に正確な時間を提供し院内には灰色の中でも明るい灰色を生み出すのでもしかすると時計の花がいつも外来診療受付開始時間の十分前を示しているのは自分も水を与えてほしいからなのかも知れないが時計に水を与えればすぐに時間は狂ってしまい永遠に水の時間となり続け時計花は溺れてしまうから誰も時計花には水を与えないのにその与えなかった水が待合室の廊下にあふれ深い水たまりを作っている。

二階から上には入院病棟があり外来の患者が間違えて入り込まないように階段は取り壊されエレベーターの時間も秘密になっていて医師すらエレベーターの時刻表を手に入れるために毎朝長い列で待つ必要があり症状の急変した患者の処置ができるのは日直明けの看護師と観葉植物だけという場合も多いのだが観葉植物は日に当たっている間は医療行為に対する医師の資格が免除されその処置も適切であると評価されており慌てることもなく医師達はあたたかい朝食を摂ってから病室を訪れることになる。

一階からエレベーターに乗った医師の足元は膝のあたりまで水に浸かりエレベーターから降りた医師が歩くたびに靴の中に染み込んだ水やズボンの内側に潜んでいた水は床の上に滴り落ちそれまで乾いていた床がその水をすする音は病棟のどこにいても聞こえ入院患者達はそれを何か新しい術式による手術の音だと信じてベッドの上で頭から毛布を被り聞こえないようにしている。

エレベーターのドアが開くたびに溢れ出す水は病院の上の階から順番に流れて来ていて上の階に上がるにつれて水に含まれる色は増え屋上に上がれば水は無数の色彩から構成されることになりもはや水と色彩との区別がつかなくなるらしく水は光から生まれたのだという迷信を信じている患者だけでなく医師も大勢がランプに水を蓄えて光り始める夜を待つのだが下の階にまで降りてくる間に光はほとんど失われたら灰色の水だけがランプの底に淀んでいてそれは病室を明るくするほど輝くわけではない。

病室のベッドの上で灰色の光のランプを抱え真っ黒な毛布を被って隠れている患者達はそのまま三日も経つと毛布が硬くなりもう毛布の外に出てこようとはしなくなるのだしそれに合わせてランプの水に皮膚がふやけて毛布と身体が癒着してしまい毛布を引き剥がすこともできなくなりさらに二日もすると患者の姿はどこにもなくなりただベッドの上には黒く硬い巻貝がいて小さくあいた毛布の隙間からゆっくりと流れ出す灰色の液体はおそらく患者の涎だったのだろうとしか思えない。

病院の低い階ではそんなふうにして患者が消えて巻貝に生まれ変わり産婦人科で生まれた未熟児達はうさぎのように長い耳を振り回しながら巻貝の殻をその耳で叩き硬い前歯で貝殻に最新のメロディーの音符を刻むのだがどの貝もことごとく違う音を立てるので未熟児たちは甲高い喜びと驚きの声を上げ次々と貝を叩いて齧って回るので三時半になる頃には病院中に巻貝の音が鳴り響きそれは間違いなく三時半の時鐘だ。

そして鐘の音の最後の響きが消える頃ボクは自分の家の前に立っていて今日は長靴を履いたままだったことに気づく。

町が移転してからというもの交差点には道に迷った人たちが集まりどの道が正しい道なのかと議論を続けているが正しい道などあるわけではなく結論のでないまま次の交差点を目指すことになる。道の正しさの議論に参加できない者は途中で別れて別の道に進み街灯が壊れて闇に隠れた交差点に達するたびに一人またひとりと姿を消しやがて彼らの明らかにしなかった意見と共に町には二度と現れなくなる。交差点の信号機の明滅する光の影には小さな羽根を震わせて人の体温を避けようとする虫の群が隠れていてその羽音はずっと途切れることなく聞こえその音は闇の中で誰かが話しかけてくる声のようにも聞こえるが勿論その音は言葉として解釈することなど不可能であるにもかかわらずその声と話をする者は後を絶たず現れ楽しそうに笑い声を上げる者の数も決して少なくはない。

町が巻貝の中に移転する前ボクが病院の前に働いていた店のあった建物は家から巻貝の口に行く道路の途中にあったのだけれど町が巻貝の中に来てからは店が開いていたことは一度もなく気がつくと建物は壊されその場所は空地になっていてしばらくして小型のユンボが動きまわっていたことに気づいた日の翌日には平たい台形に整地された黄色い土に大きな石は一つも混ざっていないように見えた。土地の上に二本の太い杭が打たれその杭にしっかりと打ち付けられた大きな看板がその土地が売地であると告げていて近づく者には誰であれ唸り声をあげもしも敷地に一步でも足を踏み入れればその足に噛み付くぞとでもいうように看板の縁を一回り大きく生えた鋭い牙で威嚇していた。人々を怯えさせたのはその唸り声や大きくて鋭く尖った牙などではなくその牙の付け根看板の周囲からあふれる強い酸性のよだれであり肉食獣が発する凶暴な口臭と硬い体毛の付け根から滲み出す体臭だったが看板は杭から自力で剥がれることはできなかったしその杭は地面に深く打ち込まれていたので誰かを襲うこともできなければその杭を揺らすこともできはしなかった。それから何ヶ月も空き地は売地のままで看板がその任務を解かれることはなかったがおそらくそれは看板を恐れて誰も買おうなどと思えなかったからであり恐れていたのは買い手ばかりではなく土地の管理者もそうだったらしく餌を与えられない看板は次第に衰弱し牙を鳴らすことはおろか唸ることさえできなくなって半年もしないうちに死んでしまった。看板がいなくなれば事は順調に進み翌日には売れてしまったその土地をおもちゃのように小さな工事車両が無数に走り回り隣家との境界にコンクリートの壁を作り地下深くにまで鉄筋を埋め込み再びならし終えた土地の上に模型のように小さな道路やビルや鉄道を作り始めた。よく見ればそれが模型などではなく実寸大の建築物であることは明らかでありそれを見た町の

人々はこのちいさな空き地に建てられる予定の建築物の設計図と都市計画の設計図が取り違えられたのだらうと噂していた。しかしその建築物や全体の構造を詳しく検討してみるとそれはまさにこの土地のために設計されたのだということは明らかでどこか他所の都市計画であるなど考えることはできない。たとえばこの東の端の用水路に面した断面にぴったりと建てられた教会は水路から立ち上る水蒸気を受けて正確に朝と夕方の二回鐘が鳴るように作られていたし町の中央から南の方にのびるアーケード街の両端の出入り口には地下鉄への通路が作られているがそれを降りて行けばこの土地の地下を走っている地下鉄の駅へと繋がっていることははっきりしていた。空き地に作られた町が来年の春に完成したときそこに誰が住むことになるのかは町の誰も知らない。

病院の屋上からは海岸の砂浜がよく見えるので水平線が溶けてその間から太陽が生まれる様子を見るために一週間前から屋上のベンチの席の予約が始まるのだが予約は一瞬で埋まってしまうので席を取れなかった看護師や医師が申し合わせて屋上に出る扉の鍵を毎週複雑なものに作り変え結局誰も屋上で日の出を眺めることができない。病院から砂浜までは歩いて二十分ほどの距離であり彼らに何かがあった時のために二人の看護師が同行するなら入院患者であっても海岸に行くことは許されていてただ一日に十人までという規則なので順番が来るまで何ヶ月も待たなくてはならないけれど毎朝暗い中を皆で手を繋ぎ歌を歌いながら歩いて行く声と姿を硬く鍵のかけられた病室の窓から聞きそして眺めるだけでまるで自分が海に向かって歩いているような気持ちになるのだという。夜明け前の闇の中を歩く患者と看護師たちの足音は最初石と石を打ち合わせる硬い靴音の繰り返しなのだけれどやがて体温や朝日の予兆のため靴が柔らかくなるとともに靴はすり減り裸足で死体の上を歩いたときの音にかわり彼らが砂浜に着くころには砂を踏む音と海の波が砂浜に打ち寄せる音があまりにも似ているため足音を聞いているだけでは彼らがどこを歩いているのか分からなくなり毎朝そのようにして幾人かの者がはぐれてしまう。ただ、院長の命令で外出を許可された患者の首には糸が巻きつけられているので午後になり病院に戻った患者の中に行方不明者がいればその糸をたぐって彼らの跡を追跡することができ追跡はいつも外科主任の担当なのだが外科医は海岸に着く前に追跡に退屈し思わず目の前にある糸をメスで切ってしまうのでその追跡が成功したことは一度もない。雨の降る日は足音よりも多くの雨音が病院にあふれ海岸に行くものなどいないはずなのだが院長の出した外出許可証は必ずナースセンターに届けられそれに従って看護師も時間になると付き添いに出かけるのであり帰ってくると出かけていない患者たちは全員行方不明になってしまうから外科主任はどこにもつながっていない無数の糸をたぐり雨の中をさまよわなくてはならずそんな日に限って濡れたナイフはふやけてしまい糸を切り断つことができず雨が上がるまで病院に戻ってこない外科主任に今どのあたりにいるのだと院長は電報をだすのだが勿論返事が来

たことは一度もない。

海岸で朝日を眺めることのできた患者達はときどき行方不明になった顔見知りだった患者が水平線の上に逆さまになってこちらを見ていることに気づいて周りの患者や看護師にその話をするけれどそれが本当なのか気のせいなのか確かめることはできなくてしかも水平線の上に逆さまになってこちらを見ている者の中に外科主任の姿を見つけた者もないのでそれは確実に幻に過ぎないはずだと言われている。ボクが付き添いで海に行った時五回に一回は確かに水平線の上に行方不明になった患者達が並んでこちらをながめているのに気づいたけれどボクはそれを誰にも言わなかった。彼らの後ろに見えた町並みはボクの家近所にあるあの建設中の小さな町と同じだったし彼らの中に混じってほかならないボクもこちらを見つめていてこちら側のボクに気がついたのか手を振ってくれたのだがその手の中には地下鉄の真っ赤な区間乗車券が見えた。

もしもあれがあの建設予定の小さな町だとすると貝殻の中にあるまだ完成していない町は偽物である水平線の上に逆さまになってこちらを見ている行方不明者達の住んでいるあの町こそが本物なのかもしれないしだとするとあの町にいるボクが本物でこのボクはただの影なのかもしれないし海にしても水平線のところで偽物に変わってしまっていたのかもしれないしその海の水面に鳴り響く三時半の時鐘の最後の響きが消える頃ボクは自分の家の前に立っていてもあの鐘の音が偽物であればボクの目の前にあるこの家にしても本物かどうかは分からないのだろう。

7

巻貝の中をまっすぐ南北に走る国道は朝になると渋滞が始まり真夜中になるまで続くのが誰も車に乗る事も国道を走ることも諦めないのは車が動こうと止まっていようと国道に車を走らせるという行為こそが他でもない自分がこの町の住人であるということの証明でありそれは幾分か誇らしさとそれだけでなく自分が存在し続けているということの実感にもつながっているのだということ意識しているにしろ無意識にしろ町の住人達は理解して何の用もない者さえもが国道に渋滞を起こすことが目的だともいうように車に乗り国道を目指すのであり今や渋滞するために国道に車を走らせる者の数はすべての運転者の九割を超えている。

国道を北上しやがて渋滞を抜けると道はそのまままっすぐ町から巻貝の口に向かいさらに外へと続くのに貝殻の外に出ればその道は巻貝の東側であることがほとんどで巻貝の北側に出ようと計画して国道を北上していた者を戸惑わせそのようにして貝殻の口を出た者は

やがて海岸線に沿って砂丘を走る沿岸道路の次の交差点で方角が分からなくなると車も方向を失い空中で垂直になってからくるくと回転し違う方向から来た車と待ち合わせたように衝突するのだがうまく二台の車が同じ回転数同じ角度で交差点に入れば二台の車は一度空中で重なって一台の車のように車の底を密着させて回転し何度か回転した後それまで忘れていた遠心力のことを急に思い出したように剥がれ車道に着地するとそれぞれの目的の方角に向かって車にひとつの傷も残す事なく走り続けるということが十回に一度はある。町がこの巻貝の中に移転して一年が経った頃には渋滞する車の重さで巻貝が傾き渋滞の中心が移動するにつれて巻貝の重心も移動し続け海岸で巻貝を観察している者達からの砂浜の乾いたところを巻貝が回転しながらどこかに向かって回転し続けているのを見たときとたくさんの報告がありそのせいで北に向かう国道が東への出口につながっているのかもしれないと言われてはいるが巻貝の中にいると町は少しも回転していないのであり巻貝のさらに奥にある三丁目のあたりから巻貝の口になる国道の出口をすかして眺めると海と海の中から生まれる砂浜が巻貝のまわりを回転しているように見えるのだしそのとき砂浜の砂が巻貝の上に降りその降り止まない砂雨に町が埋まるのではないかと子供達は怯え子供達を安心させるため父親は証拠写真だと言って回転する海岸を撮影するのだが写真の中では海岸は静止しておりどちらが上なのかも分からない。

町の上空に張り巡らされた天井のような巻貝の内側の縞模様を丹念に観察するとこの巻貝が右回りに巻いていることは明らかで町が移転した直後には確かに左回りに巻いていたはずだという者も多くそれは単なる錯覚ではなくその記録は町の天体観測所の画像保管庫に残されていてではいつ左回りから右回りに変わったのかまた変わるときには一瞬でもどちらにも回らないつまり巻きがなくなり直線になっていたことがあるはずだが実際にそうなったことがあるのかどうかを記録の中から探しているのは二名しかいない天体観測係だけなので二人はもう半年も眠っていない。

天体観測係の所有する望遠鏡は常に地面や床に垂直になるように設置されていてレンズ越しに見える天体は輝いているようには見えないと天体観測係の二人はそれぞれ思っているもお互いが相手にそれを問うことにはためらいがあり朝と夕方の連絡会ではその天体についての赤緯を伝え赤経を告げるだけでお互いの手に触れることもなくこの頃では望遠鏡が焦点を合わせている天体はもしかすると誰かの描いた絵なのではないかと天体観測係のホシノミルキは思うようになっていてその証拠として星の表面に見える稜線や海岸線がこのところずっと鉛筆で書かれたようなぼやけた線にしか見えないし天体にある海水は微動だにせず火山は煙をあげることにすらないとノルホキシミは思うようになってそれをもう一人の天体観測係に伝えるべきなのかどうかためらっていたが望遠鏡は巻貝の口に向けて地面に水平に設置しなければ本当の星を見ることはできないのであり垂直に向けられた望遠鏡で見えているものはもちろん巻貝の殻の内側にある模様にすぎない。

天体観測所は町の郊外の空気の澄んだ湖のほとりに百年前時の市長の命令によって建築が開始され市長の死とともに完成したという記録があり天体観測系の二人はいずれその施設で働くことを熱望し通信教育で天体観測学を学び続け毎週送られてくる教材の付録部品から新しい望遠鏡を組み立てては完成するたびにその望遠鏡を図書館の書庫にしまいこむので今では図書館の書庫には本の何倍もの数の望遠鏡が保存されていて望遠鏡を覗き込むとはたして星を観察しているのか本の文字を読んでいるのか判然としなくなるのだが天体観測系の二人以外誰も書庫に望遠鏡が隠されていることを知らない。

図書館には文字の数と同じだけ砂時計があり一つ一つの時計がそれぞれひとつの文字の時間を計っていて司書は朝から次の日の朝までずっと砂時計をひっくり返すのに忙しく忙しすぎて日に三度は間違えて望遠鏡をひっくり返していることにも気づいていなくてそれで望遠鏡の焦点が文字に合ったり砂時計の砂に合ったり定まらないので司書は美しい文字こそが星であるといい印刷所は見事な曲線の文字こそが星であるといい出版社は無駄なく配置された文字こそが天体なのであるといい時計技術者は勿論砂こそが天体であることは物理的な根拠に基づく真実なのだというのだけれど文字と砂を区別できるのはホシノミルキとノルホキシミだけなのにその二人ですらまだ本当の星は見たことがない。

巻貝の内部は湿っていてそれは望遠鏡のレンズの膨らみを増し望遠鏡の倍率を高めるのだがそれでも望遠鏡で見える星の輪郭はさらにぼやけある程度以上拡大されるとその輪郭の中に小さく文字が記されていることに気づいたノルホキシミはそれが自分の名前だったのでそのことを誰にも打ち明けられず知らず知らず望遠鏡を覗きながら唇を噛み締めときどき接眼鏡から唇にこぼれおちる塩の結晶が裂けた唇に滲みて痛みに目からこぼれた涙がまた裂けた唇に滲みて痛むということを繰り返しているうちにノルホキシミの唇は黒ずみ声も硬く変わりそのことを声変わりなのだと言ったホシノミルキに言うのだがホシノミルキはそれに気づいたそぶりもなくおそらくそれは硬くなりすぎた唇が声をすべて吸い取ってしまい唇より先に声が届いていなかったからなのに違いない。

毎晩砂時計が止まった後ホシノミルキは貝殻の外側に出ると腰にぶらさげた小さなバケツいっぱい糊を少しずつ手ですくっては貝殻に小さく空いた穴をふさぎ貝殻の成長とともに生まれる亀裂に詰めて町に砂雨が降らないようにするのだがそのせいで望遠鏡のレンズに落ちる星の光は失われ天体観測所から命じられている観測しなければならない光の量が次第に足りなくなってしまうのでノルホキシミは自分の観測する光の中に貝殻の中の大気に含まれる塩の結晶の発する光も含めていることには目をつぶっているのだしホシノミルキも砂時計の砂に混じるネックレスや指輪のような装飾品が発する光の量もあわせて報告書には書いていてそのことをノルホキシミが何も指摘しないのは何故なのだろう。

深夜になってホシノミルキが部屋を出て貝殻の外側を登り始めるとノルホキシミはその後を見つからないようにつけて行きホシノミルキが塞いだ穴や貝殻の隙間に詰めた糊を指で

はがしてはすべてを元の通りに戻して、昼間になるとその穴が塞がっているかどうかを確かめに、来たらしい市の職員の姿を望遠鏡で観察し、その似顔絵をノートに描き、その人物に町で出会ったならばその後を追跡して住所や名前や家族構成など分かる限りのことを調べ、そのノートに記録して、天体観測所への報告書にはその記録も含まれているが、ホシノミルキがそのことを指摘しないのは何故なのだろう。

天体観測所には前市長の死後、市長のクローンが住んでいて、その市長のクローンも他のクローンと何ら変わりなく、昼も夜も誰かを連れ込み、性的行為を絶え間なく続けているが、複写するときに欠落した遺伝コードに書かれていたはずの射精する機能が無いため、その行為には終わりがなく、最初は喜んで、いた女たちもやがて性器が加熱し、水ぶくれになり、それが破れ、部屋中に火傷の水疱の中の水が撒き散らされる頃には、痛みに堪え兼ねてやめてほしいと叫ぶのだが、クローンはそれをさらなる快楽の欲求だと思いつつ、もっと激しく腰を動かすので、熱を持ち、やがて結合部分の水分が蒸発し、煙さえあげはじめると、女はいずれも気を失い、身体中を痙攣させ、動かなくなるので、それに気づいたクローンは、身体を離すと相手の性器は既に炭になっており、市長のクローンの性器も黒い石炭の塊になって、股間から落ち、床に当たるときの音は町のどこにいても聞こえる。

天体観測所に届けられる報告書を読むのは市長の仕事だったので、今ではそれは市長のクローンの仕事と考えられているが、クローンは性交に忙しく、報告書を読む暇などないので、いずれ読まれるときまでの一時的な措置として、市の図書館の地下書庫にすべての報告書は保管され、いずれ市長が読むまでは誰にも読まれないよう、厳重に鍵がかけられ、さらにその鍵のありかは市長にすら秘密になっているので、新しい報告書を運び込むために扉を開けることができず、いつからか新しい報告書は廊下に散乱しているが、鍵の場所をあきらかにするために、市長の性器は毎日炭にならなければならないのだと、赤いインクで書かれたピラが町では配られていて、それを根も葉もない噂だと断定する市長の部下たちは、ピラを配っている首謀者を見つけ出そうと、町かどに立って人々を監視している。

市の職員は職務上市の外に出る事は禁じられていて、年に二度ある貝殻の外への視察を命じられた職員は、他の職員や家族に見送られ、長い行列を作って、国道を北へと歩き続け、やがて貝殻の外に出る口にたどり着くと、国道を離れ、傍の貝殻の壁の前に並んで座り、そのまま座り続けると、やがて半年もしないうちに、身体は貝殻に吸収され、市の職員名簿から名前が削除される規則なのだが、壁の縞模様の中を探せば、彼らの元の姿をぼんやりと見つけられるので、職員名簿の彼らの名前には、細い抹消線を引かれるだけで、インク消しによって見えなくされることはない。

ホシノミルキの報告書に書かれた職員の似顔絵や住所や名前や家族構成などは、図書館の廊下の水分と図書館の蔵書の文字を栄養として、育ち太い蔓を伸ばすと、やがてその先に青い花を咲かせ、その花が枯れると、すぐにそれは職員名簿の実となって、廊下をペンキのにおいで満

たすので行方の知れない市の職員について知りたいと思った者たちは最新の職員名簿をさがして廊下をさ迷ううちにペンキに含まれる揮発性の成分に心を侵され自分が市の職員であるという天からの声を聞いて市の職員となり図書館の中にあるはずの市庁舎をさがして歩き続ける。

図書館の書棚に記された分類番号は三十桁あるが本だけでなく天体望遠鏡や砂時計やその砂時計の砂の一粒一粒に番号を与える必要がありあと一月もすれば番号が足りなくなるだろうと言われていてそのため新任の市の職員は新しい数を作るために地下図書室のさらに何階か地下にある歴史発掘室に集められ床に積み上げられた職員名簿から職員番号と頁数をスプーンの縁でこそげて集める仕事をし続けてその部屋から出てくることがないのだがスプーンが職員名簿に擦れるしゃりしゃりという音は地上まで聞こえるのだし職員番号を奪われたため市の職員でなくなって記憶を失い亡霊のように図書館の書棚と書棚の間を彷徨う姿は今だ新しい数を作るという仕事が終わっていないことを示している。

ノルホキシミの報告書は数字が多くしばしば職員名簿が足りない日にはそれにスプーンがあてがわれ数字を剥がそうとする職員がいるのだがノルホキシミの筆圧が高くて簡単には剥がれず数字の一部分が剥がれても数字のどこかが報告書の頁に残ってちぎれた数字は割り切れない数と割り切れた部分の境目から黒い汁を流して報告書を汚し次第に誰にも書かれていることがわからなくなるのでその黒い液体をコップに集めてコップに一杯になるとそのたびにノルホキシミはそれを飲み干して身体が灰色になってもやめられないでいる。

ホシノミルキは書庫に置いていた望遠鏡を中庭に持ち出し何本もつなぐとつなげばつなぐほど倍率が増え宇宙がどんどん小さくなってゆくことに気づきおそらくこのまま倍率が上がれば図書室の中にいながら巻貝の外にも存在できるようになることに気づきホシノミルキの作った七十二の望遠鏡をつないでもそれだけでは国道の出口までしか達することができなかつたので最近姿を見なくなったノルホキシミの望遠鏡を五十三本借りてつないでみたのだがノルホキシミが帰って来たときに話をするつもりだったのだけれど望遠鏡をつなぐとすぐにレンズが溶けて癒着するのでもとに戻すことはできず言い訳を考えながらその望遠鏡をのぞきこんだとたんホシノミルキは図書館の中庭にいながら巻貝の外側にある砂浜で何もない空を見上げている自分に気づくだけでなく同時に宇宙の果てにある宇宙観測所の椅子に座り報告書の中一頁にノルホキシミが描いたホシノミルキの似顔絵は似顔絵などではなくホシノミルキ自分自身だと分かったとき望遠鏡の筒の内側に塗られた炭素に含まれる柔らかい結晶の縁にこすられて望遠鏡の中を通過する光がすこし灰色になっていることも知った。

ホシノミルキが消えたとき望遠鏡の接眼レンズから小さい月がこぼれ落ちその後から月にひきづり出されるように銀色の海水が溢れ出てそれは図書室の床を洗い本を浸し望遠鏡を浮かべながら大きくうねる海に変わるとやがてその海の波の先端が結晶となって図書室の

天井に貼りつくやたちまち結晶は橙色の砂になり天井から海の中に砂の雨となって降り注ぐのだが海は砂で埋まることもなければ天井の砂丘が尽きて海に変わることもなく図書室は海の中でお互いに突き刺さり折れ曲がった望遠鏡に観測されて幾度も屈折させられもとの大きさの二倍の大きさに拡大され二倍になった図書室は図書室のなかに隙間がなくて図書室の窓から外に吐き出されそのとき回転して逆さまになった図書室は巻貝の外にある砂浜と比べると三倍の縮尺の砂浜になっているので砂粒と砂粒の隙間に灰色の影になったノルホキシミが発見される。

図書室では毎日夕方の三時半になると鐘の音が鳴り響く。図書室にはどこにも鐘などなく鐘の音を聞く者もないのだが百二十五本の望遠鏡を繋ぎ合わせた望遠鏡は鐘の音に合わせて震えそのたびに世界の拡大率は大きくなり図書室は誰も居られないほどに小さくなっていくことをその接眼鏡を誰かが覗けば知っただろう。